
Special day

月下の奇術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S p e c i a l d a y

【Nコード】

N 1 2 3 2 M

【作者名】

月下の奇術師

【あらすじ】

6月21日は快斗のバースデーと言うことで書かせていただきました。楽しいパーティーのはずがある意味、事件へと発展してしまします！！

今日の天気は雨……。

パツとしない日だった……。

その中にただ1人、雲の間から日が差すように明るい人がいた。

その彼の名は、“黒羽快斗”である。

そう、今日は6月21日。快斗の誕生日だった。そのおかげでデションがあがっていた。

そして今、彼はついこの前まで宿敵として戦っていた工藤新一の家へと向かっている。

今日、そこで快斗の誕生日パーティーをするようだった。

「青子や新一は何をしてくれんのかな？」

快斗はこんなのにきな事を呟いていた。

このあとのとんでもないパーティーがあるとも知らずに……

―工藤宅―

「ふふふッ♪どんな顔するかな？」

何を企んでいそうな笑みをこぼしているのは、快斗の幼馴染みで彼女である中森青子。

「アイツは元怪盗だからな。即座に食いつくだろうぜ？例え怪盗をあの手この手のためにやっていたとしてもな」

自信たつぷりに言い放ったのは、ついこの前まで敵同士であった、探偵の工藤新一。

他にも、新一の幼馴染みであり、彼女である毛利蘭。新一とよきライバルの服部平次と幼馴染みで彼女の遠山和葉という、お馴染みのメンバーが集まっていた。

「工藤君、“あの作戦”って具体的に何やるん？」

「ああ、それはな？簡単といえば美術館を作り出すんだ」

「どつゆつ意味？」

「言っちゃえば、快斗に今日だけ怪盗に戻ってもらうの！しかもリアルにね。」

「青子ちゃん？そんなことしていいん？」

「いいのいいの！」

ここで状況を詳しく伝えます。

まずは、新一の広い部屋の真ん中に宝石を配置する（勿論、本物です）青子↓中森警部

新一&平次↓探偵

蘭&和葉↓警備員

とゆう役になりきり、怪盗キッドの舞台を作りだそうとしている。

「それにしても、よお考えたな」

「でしょ？」

このサプライズを考えたのは青子だった。

「じゃあ、もうそろそろ快斗来そうだから皆外に出よう？」

「待つて！！挑戦状置いてかなきゃ！！」

それから、仕掛人の5人は隣のあがさ博士の家に身を潜めた。

——快斗side——

ピンポン♪

「誰がいる？」

「……………」。

返事がない……

人を招待したくせに留守か？

俺は何処かに隠れているんだろうと言う甘い考えで足を踏み入れた。

パーティーなら広い部屋だと確信した俺は、一番広い部屋へと向かった。

新一の家には数回来ていたので、場所は把握していた。

「よおッ……………誰も居ねーの？」

ドアを開けてクラッカーと言う妄想はバラバラに砕け散った。

「ん？なんだあれ……」

目に入っただのはやっぱり、挑戦状。快斗宛てではなく、“怪盗キッド”への。

「俺はもう怪盗キッドじゃねーぜ？……もしかしてあいつらが企んだのか？でも、もう盗みは……」

「あら…貴方は売られたものは全て買うんじゃないのかしら？」

出てきたのは、灰原哀だった。

「だけだよお……」

どっから出てきたんだ？と思いながら、答えた。……が、哀の視線が怖くなった。

そうこうしてるうちに、俺が怪盗だったころの心情がわき出てきた。

「受けてやるうじゃねーか！」

「それでこそ貴方ね……まあ、頑張つて？私は警察にでも連絡しておくわ？ちなみにその宝石は本物よ？」

すると哀は何処かに行ってしまった。

「本物が……」

一応、念のため手に取り確かめた。

んで俺は遅くも重要な事に気がついた。

「警部来んのか？」

まさかとは思いつつも、俺は冷や汗をかいた。

「まあ、警部ぐらい……つてか予告状書かねーと！」

快斗は予告状を置き、一度自分の家へと戻った。

この後快斗が帰ったのを確認した仕掛人御一行が戻って来た。

「新一の予想通りね♪」

「だろ？アイツはそうゆう奴だからな」

「うーんと、快斗が予告したのは午後5時ね？あと……1時間！？」

「キッドも大胆やなあ」

「じゃあ、時間もないから皆早く着替えてね？」

それぞれ分担された役へと変装し、博士の作った変声器で声を変えた。

——午後5時——

パタッ！

「キットだ！」

電気が落ちたとたん、中森警部（青子の変装）が叫んだ。

「はやく警備員！明かりをつけろ！」

次は新一が叫ぶ。

するとすぐに電気がついた。

「警部！！宝石がありません！！」

警備員に扮した蘭が叫ぶ。

「何！？奴もいない…まだキットは近くにいるはずだ！」

「服部、なんかわかったか？」

「あつ…いや、わからへんわ……」

服部が答えたとたん、仕掛人5人はアイコンタクトを取った。

「そりゃわかるわけあらへんな！平次！」

「「「「服部キッド！」「」「」」

一斉に声を上げた。

「えっ？……警部が青子！？」

快斗はビククリしている様子……
ドッキリ大成功と言ったところか……

「ああ……俺の誕生日が怪盗で潰れちゃった……」

この日はこの後1日中笑いに包まれていたそうだ。
機嫌の少々悪い快斗を囲みながら……

そうして快斗の誕生日パーティー(?)が幕を閉じた。

（後書き）

ギリギリです！！

間に合わないかもしれないと、諦めかけましたがなんとか……
やっぱり、快斗の誕生日は外せません！！

ちょっとかわいそうな快斗でしたが、あの後には普通にパーティーをやったそうなので大丈夫だと……

次の行事では、この誕生日のネタも少し取り入れようと思っています。

よかったらご指摘、ご感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1232m/>

Special day

2011年1月4日02時09分発行